

イノベーターとしての山本五十六

相澤 淳

ただいま紹介に預かりました相澤でございます。私は戦史を研究分野としておりまして、組織の問題は専門外と思いつながら、どのような話をしたらよいのだろうかと思いましたが、結局、戦史の話しかできませんので、8～9割戦史の話で、最後、「イノベーターとしての山本五十六」というお題を頂いていますので、それに係わるお話をします。具体的には、山本が構想し断行した真珠湾作戦ということについて、その経緯を追いつつお話していきたいと思つています。

山本五十六の真珠湾構想は、それまでの伝統的な海軍の作戦構想とは大きく異なるものでした。1941年1月初旬、対米戦争に入っていく11か月前、連合艦隊司令長官の山本は、及川古志郎海軍大臣に「戦備に関する意見」という意見書を送り、対米戦が避けられない場合の開戦劈頭の真珠湾攻撃を次のように強く訴えておりました。「日米戦争において第一に我の遂行せざるべからず要項は開戦劈頭に敵主力艦隊を猛撃撃破して米国海軍及び米国民をして救うべからざる程度にその士気を喪失せしむること是なり」。そして、具体的な作戦実施については「敵主力の大部分が真珠湾に在泊する場合は、飛行機隊をもってこれを徹底的に撃破」することとし、主要兵力については「第一、第二航空戦隊（当時の全主力空母部隊）をもって月明の夜または黎明を期し全航空兵力をもって全滅を期し敵を強（奇）襲する」ということでありました。

ところが、それまで日本海軍が伝統的に培ってきた対米作戦計画というのは、日露戦争における日本海海戦の大勝利の栄光の下に、アメリカ主力艦隊が極東方面に進撃するのを待ち、これを日本の主力艦隊によって迎え撃つ、いわゆる邀撃作戦という「守勢の作戦」を金科玉条とし、そしてその戦いの主役は勿論、戦艦でありました。そしてこの戦艦同士による艦隊決戦での大勝利こそが日露戦争のときと同じように戦争全体の勝利にもつながると考えていたわけでした。

それに比べて山本が主張する真珠湾「空襲」というのは、当初から敵の根拠

地に切り込み、航空機によってこれを撃破するという攻めの作戦、いわゆる「攻勢の作戦」であり、伝統的な海軍の作戦構想をひっくり返すほどのものでありました。山本は一般的に対米開戦慎重論者として知られておりますが、それは併せて4年にわたる2回の駐米経験（1919～21年、1926～28年）からアメリカの強さをまず身をもって知っていたからである、と理解されております。しかし、一方でこの駐米期間というのは、日露戦争から一貫してアメリカを仮想敵国としていた日本海軍の駐在武官として、敵を知り、また戦争の際の作戦を考える研究期間でもありました。実際、山本は駐米勤務を終えて帰国した直後に、「対米作戦は守勢をとるのは不可であり、ハワイを攻めるような積極作戦をすべきである」という主張を海軍内の講演で語っていました。

また、1930年のロンドン海軍軍縮会議で山本は次席随員として派遣されましたが、結局この軍縮会議において日本は要求したところの対米7割を得られなかったということになるわけですが、これに対して山本は、帰国後、「劣勢比率を押しつけられた帝国海軍としては優秀なる米国海軍と戦うとき、先ず空襲をもって敵に痛撃なる一撃を与えるべき」という意見を表出しています。日米開戦を遡ること10年以上前の1930年のことです。すなわち山本の開戦劈頭の真珠湾空襲は、10年以上の構想期間を経て計画されたもので、小国日本が大国アメリカと戦う時の秘策だったのです。

次に真珠湾攻撃が実際に具体化されていく段階を述べていきたいと思えます。山本は及川大臣に意見書を提出した後の1月下旬に、海軍航空隊生え抜きの第11航空艦隊の参謀長であった大西瀧次郎（後の特攻の父）に具体的な作戦の基礎案の作成を命じていました。その際、山本は「目標は米国戦艦群である。攻撃隊は雷撃隊による片道攻撃とする」という一案を手紙で示していました。大西はこれを受けて、翌月の2月初旬に、今度は第11航空戦隊参謀の源田實に、その基礎研究を命じています。源田は山本長官の手紙を見て「全く意表を突く着想に驚いた」と回想していますが、攻撃方法や攻撃目標については異論がありました。そして3月上旬、「主攻撃目標は空母で、副目標は戦艦である。また参加空母は全兵力の5隻（当時、その後加わる「翔鶴」、「瑞鶴」はなかった）を投入すべきである。航空機による片道攻撃ではなく反復攻撃を考え、従って航空機を収容するため200海里以内に空母を接近させるべきであ

る」という作戦案を提出しました。源田案を受けた大西は更に検討を重ね、「出発地を択捉島の単冠湾とし、北方航路をとる」ということを加えて4月に山本に提出しました。

なお、山本が望んだ雷撃隊による攻撃は、真珠湾が12mという水深の関係から大きな困難を伴うものと見られていましたが、山本は雷撃ができないなら所期の効果は期待できず、空襲は断念する他ない、という考えであり、結局これが浅沈度の魚雷攻撃の可能性を追求していく（雷撃機の接近方法とし超低高度、また、魚雷に羽のようなものを付けて深く沈まないようにする）ことになったわけです。攻撃目標について、主目標を戦艦とする山本案は、航空主兵論者と見られていたことからすると意外にも感じますが、当時の世界の海軍の常識はまだ戦艦主兵論でありましたし、また戦艦を叩くことの政治的効果は確かに無視できないものであったとも言えます。また雷撃機による片道攻撃ということについては、これは開戦劈頭から決死的な攻撃を仕掛けてくる日本への恐怖感をアメリカ海軍及び国民へ与えることによってその心理的効果、士気の喪失を狙ったものと考えられます。

大西案を受け取った山本は、これに若干の修正を加え、大西に上級司令部の軍令部に持参させ、当時の第1（作戦）部長であった福留繁に説明させています。福留というのは前年の3月まで連合艦隊参謀長ということで山本に仕えていた人物であり、その時に山本から「飛行機でハワイは叩けないものか」と漏らされていたが、第1部長になった福留は大西から渡された作戦案を金庫にしまい、しばらくは日の目を見ないということになります。

しかしながら約半年後、1941年7月下旬には、南部仏印進駐があり、アメリカは石油全面禁輸にまで至る強硬な経済措置を日本に科していきます。ここに日米間の緊張は一気に高まり、こうした危機に対して軍令部では対米英蘭作戦に関する作戦案を8月末頃までには概成します。しかし、その中に、山本の真珠湾攻撃は入っていませんでした。一方、連合艦隊も軍令部の同意はないものの真珠湾攻撃を含む作戦計画を起案し、同じ8月下旬には作り上げ、それをもとに9月中旬に目黒の海軍大学校で山本長官統裁の下に10日間の図上演習を行い検討しています。この図上演習終了後の9月下旬、軍令部において福留第1部長と連合艦隊参謀長の宇垣纏が会合し、真珠湾攻撃の可否について真剣

な討議が行われております。しかし、軍令部側の意見は極めて慎重で、その作戦反対の理由は、「真珠湾攻撃は投機的で、成功の確算が低く、下手をすれば事前に発見され全滅の恐れ」があり、また「開戦当初に実施する南方作戦に航空兵力として空母部隊が必要である」ということであります。

しかし、こうした反対意見というのは、山本にとっては十分に考慮済みだったようであります。先の1月初旬の意見書の中で、「万一、ハワイ攻撃における我が損害が甚大なる」ことを恐れて、今まで通り「東方に対し守勢」作戦を採れば、「敵は一举に帝国本土の急襲を行い、帝都その他の大都市を焼尽す」ことができる。その場合、たとえ南方作戦が成功したとしても「世論の激昂」と「国民の志気の低下」というものはどうすることもできない、としていたのであります。こうした山本の決意は、宇垣参謀長を通じて福留第1部長に伝えられてもいました。また同時期、「翔鶴」、「瑞鶴」という新しい大型空母が完成し、これを南方作戦に投入できる見通しも立ってきました。そこで軍令部は連合艦隊が熱望する真珠湾作戦に第1、第2航空戦隊の「赤城」、「加賀」「蒼龍」、「飛龍」を投入することを認め、両者の対立は一端解消するかに見えたのです。

ところが、連合艦隊は10月に入って、旗艦「長門」で実施した図上演習にもとづいて、第5航空戦隊「翔鶴」、「瑞鶴」を含む6隻全てを真珠湾作戦に投入することを求めます。これに対し軍令部は南方作戦の兵力不足を理由に強硬に反対し、両者の交渉は再び行き詰まることとなります。それに対して、山本は、10月18日に腹心の前任参謀、黒島亀人を東京に派遣し、その際、空母の全力投入について職を賭して断行する決意であることを伝えます。しかし、それでも軍令部の第1部長以下は反対の態度を崩さなかったのですが、ここで黒島は直接、伊藤整一軍令部次長に直訴し、それが永野修身軍令部総長に伝えられ、山本がそこまで言うのであれば、ということで、トップダウンで連合艦隊の希望通りに作戦は認められることになったわけです。これが、真珠湾攻撃が最終的に決定された経緯です。

作戦の経緯については、簡単に述べておきたいと思います。攻撃を実施した第1航空艦隊の司令長官は南雲忠一であります。機動部隊は6隻の空母「赤城」、「加賀」、「蒼龍」、「飛龍」、「翔鶴」、「瑞鶴」、それから戦艦2隻、重巡2

隻、軽巡 1 隻等で編成され、これら選別された参加艦艇についてはハワイまで行くということで航続力が考慮されました。それでも途中の燃料補給が必要とされ、給油艦 7 隻を伴って行きますが、その洋上補給は、冬の北方航路で困難が予想されるものでありました。この機動部隊は行動を秘匿し、11 月 23 日までに単冠湾に集結しました。空母として最後に到着するのは「加賀」でありませんが、これはギリギリまで改造に時間がかかった浅沈度の改造魚雷を佐世保で引き取った後に到着したということでした。なお、山本長官は、出撃前の 11 月 17 日、佐伯湾の「赤城」艦上にて各級指揮官、幕僚、飛行科士官に訓示し「奇襲に頼ることなく強襲を建て前とする」と刺し違えの覚悟を求めています。真珠湾攻撃は、結果として「奇襲」で成功しますが、山本は「強襲」での決死の覚悟も求めていたのです。

11 月 26 日に、この機動部隊は単冠湾を出発し、途中、心配していた天候にも概ね恵まれ、洋上給油をしつつ進出します。12 月 2 日、有名な電報、「ニイタカヤマノボレ 一二〇八」ということで、予定通り開戦は 12 月 8 日となるわけです。攻撃前日、「赤城」の艦上に日露戦争以来の伝統である「皇国の興廢この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」を示すところの信号旗が掲げられ、敵の予想哨戒圏の中に突進していきます。そして、12 月 8 日 0130（日本時間）、無事、ハワイ北方 230 海里に到達した機動部隊は、第 1 次攻撃隊 183 機、その後、第 2 次攻撃隊 167 機を発艦させ、攻撃隊発艦後、收容のため南下を続けます。第 1 次攻撃隊は現地時間の 12 月 7 日 0730 オアフ島北方カップ岬に到達し、総隊長の淵田美津雄は真珠湾上空に迎撃の態勢が見られなかったことなどから奇襲成功と判断、0752 に「トラトラトラ」を発信したわけです。このトラ連奏は広島湾の「長門」でもキャッチされたということでもあります。なお、真珠湾のアメリカ艦艇については、事前の偵察で戦艦 8 隻は在泊しているが空母 2 隻は不在であることが確認されていました。

真珠湾攻撃の戦果は、アメリカ太平洋艦隊の主力である戦艦 8 隻のうち半数を撃沈、大破するなど全てに損害を与えました。当初、山本の主目標は戦艦という作戦構想からは、この奇襲の目標は達成されたということも言えると思います。ただし、源田案が示した主目標は空母といった観点からすれば、アメリカの空母 2 隻の不在は日本側にとって大きな「損失」で、とくにその後、ミッ

ドウェイ海戦に至るまで、この空母部隊が活躍することを考えると、この感が強くなります。しかし、日本側にとって集中使用した空母部隊がほとんど無傷なままで、アメリカ主力艦隊に大打撃を与えたこと、そして、開戦初頭の全日本軍の作戦の中で最も重視した南方資源地帯の占領という南方作戦に対してアメリカ艦隊の脅威がなくなったことの意義は大きかったと思います。

ただし、山本は、真珠湾作戦を南方作戦遂行上の支援作戦（支作戦）と位置づけていたわけではありませんでした。「開戦劈頭においては極度に善処」し、「勝敗を第一日において決する覚悟」で「全滅を期し」実施するというまさに主力作戦（主作戦）だったのです。すなわち真珠湾では、より徹底した戦果拡大もあるべきだったのであり、そこで持ち上がってくるのが、いわゆる「第二撃」問題であります。この「第二撃」は南雲も第1次攻撃隊収容後、準備を命じ、これに参加できる兵力の速報を求めていたのですが、全攻撃隊収容後も北上するのみで再攻撃の命令は出されなかったことは周知のとおりです。これに対し第2航空戦隊司令官の山口多聞は「第二撃」攻撃隊の「準備完了」という信号を送っていましたが、それ以上の攻撃は指示されなかったのです。一方、広島湾の連合艦隊司令部内においても、南雲長官に「再度攻撃すべし」と打電すべき、という意見も多く出されましたが、結局これも時期を逸し、発令しても明朝になるということで山本長官の制止によって発信されておられません。

実は、山本長官は、及川海相に宛てた先の意見書の最後に、真珠湾作戦の実施にあたっては、自分が「航空艦隊司令長官を拝命して攻撃部隊を直率する」ことを切望していました。すなわち、山本は連合艦隊司令長官を自ら降りて、隷下の航空艦隊司令長官になるという「降格人事」を求めていたのです。もしこうした「人事のダイナミクス」が行われていれば、基地機能が残る真珠湾への「第二撃」やオアフ島近海にあった空母「エンタープライズ」に対する攻撃も実施できていたかもしれません。

しかし実際、南雲艦隊は、「第一撃」（第1次攻撃隊、第2次攻撃隊）で真珠湾の戦艦群を潰したことで十分であると判断し、そしてそれは確かに全日本軍を通しての最重要な南方作戦の支作戦としても大成功でありました。南雲艦隊の戦場離脱も当然だったのです。山本の「全滅を期し敵を強（奇）襲」し、

「開戦劈頭に敵主力艦隊を猛撃撃破して米国海軍及び米国民をして救うべからざる程度にその士気を喪失せしむる」、そしてさらには、「勝敗は第一日において決するの覚悟」という真珠湾作戦の意図は、最後の最後まで上級司令部であった軍司令部にも、直下の南雲司令部にも十分説得されておらず、したがって、当然その理解は得られていなかったのです。

最後に、イノベーターとしての山本五十六について三点ほど話をしたいと思います。

ひとつは、真珠湾作戦に至るまでの構想と実現をイノベーションと考えるならば、山本は確かにある部隊レベルまではイノベーターであったと言えます。しかし、いわゆる最高指揮官として、組織全体を纏めるという意味でのイノベーターとしては十分その能力を果たせなかったという意味において疑問は残ります。しかし、これは山本自身も分かっている、「自分を連合艦隊司令長官から降ろしてくれ（後任には米内光政を示唆）」と及川に訴えていましたし、「自分はその下で、航空艦隊司令長官をやりたい」と切望していたわけで、いま指摘したことは余計なお世話と言われるかもしれません。

ふたつは、山本は戦艦主兵論が主流のなかで航空主兵論者であったということで、ある種イノベーターと言えます。しかし、真珠湾の主目標を当初「戦艦」としていたということで、完全な航空主兵論者のイノベーターであったということは言えないかもしれません。実は、この問題は、南雲が「第二撃」をしなかった問題にもつながります。山本の最初の「主目標は戦艦」に対して、反対意見を言ったのは源田でありました。したがって、「第一撃」でその戦艦部隊をほぼ撃滅した後、南雲が「第二撃」をしなかったからといって、どれほど南雲を批判できるかということです。

三つは、山本個人の問題ではありませんが、組織全体の問題として、開戦前の人事のダイナミクスがなかった、という問題もあると思います。これは組織が硬直化していたということだと思いますが、前の日露戦争開戦時には、日本海軍は人事のダイナミクスを発揮しています。開戦ほぼ半年前の段階で、連合艦隊司令長官を交代しているのです。ロシアとの開戦に備え、日高荘之丞（そうのじょう）から東郷平八郎に替えております。実は日高の前が東郷であり、それを元に戻されるのは替えられた日高にとっては非常に不名誉なことで

エアー・パワー研究（第4号）

あったでしょうが、戦争に向かうダイナミックな人事があったのです。日米開戦時の人事は、序列通りに動いてしまい、日露戦争時のようなことは起きていなかったと言えます。山本五十六は、その希望にもかかわらず航空艦隊司令長官を拝命できませんでした。そういった問題がありました。今日は真珠湾攻撃を通してイノベーターと組織の問題について最後に若干指摘させていただき、終わりたいと思います。